

校門の外をめざした学校唱歌

卒業式による広報戦略

有 本 真 紀

一 「感動と涙」の卒業式ソング

小学校教員養成課程の学生を対象とした音楽理論の授業で、長調と短調の違いを説明する場面での出来事である。数曲を例示して長調と短調の違いを感じ取るよう促した後、各自ポケット歌集をめくりながら、短調と思う曲を挙げてもらう。歌集は多くの小学校で採用されているもので、約一六〇の掲載曲中、短調は一二％ほどしか含まれていない。この際の回答には、『大きな古時計』『千の風になって』などの曲とともに、『巣立ちの歌』がありがとうさようなら』といった卒業式の歌が混じる。こうした誤答は、短調＝悲しい感じ、卒業式＝別れ・涙という関連図式から導かれ、音組織ではなく歌詞や歌われる状況に依存して判断したた

めに起きる。多くの学生はこの誤答を聞いて笑うが、卒業式の歌が涙を誘うことには共感を示す。彼らは、卒業式ソングが大好きだという。

しかし、卒業式の歌への思いは、学校文化に親和性の強い教員志望の学生たちに特有のものではない。毎年二月から三月にかけて卒業式にまつわる新曲が発表され、オリコンなどの人気ランキングでも「卒業（式）ソング」はひとつのジャンルとなっている。そのすべてが学校で歌われることを想定してはいないし、歌の中心主題は恋愛であったり、青少年期特有の心理描写であったりするが、ネットを検索すれば「卒業式に歌いたい曲」「卒業式といえば思い浮かぶ曲」などのページが並び、卒業式の歌に対する人びとの関心の高さがうかがえる。日本の卒業式が三月の風物

詩、「国民的行事」となつて久しく、卒業式の歌は「大衆文化」としての広がりをもっているといえよう¹。

日本の卒業式には涙がつきものである。とはいえ、ここで問題にしたいのは何割の人が実際に泣くかという統計的事象ではなく、「涙、涙の卒業式」といった言い回しが慣用句として流通しているという事態、つまり人びとの観念の中で卒業式と涙が結合していることである。加えて、卒業式の涙がすぐれて社会的な分泌物であることにも注目したい。ネット上のQ & Aには、「卒業式で泣けない私はおかしい?」「学校に良い思い出はないのに、雰囲気で泣かないようにするには?」「娘の卒業式に泣くのは変?」といった書き込みが多数寄せられ、涙に向けられる周囲の目に対して、強いこだわりのあることが確認できる。それは、「卒業式で泣かないと／冷たい人と言われそう」²と歌われるほどに切実な問題なのである。「適切に泣く」ことが要請され、逸脱した場合にはサンクションが与えられるという、社会的な力が働く場が卒業式である³。

泣きが適切である重要な条件として、適時性がある。これは卒業式に限らず、「お涙頂戴」を企図する映画やドラマなどにも言えるが、いかに泣かせることが目指されていても、始まってすぐに泣けるわけではない。お笑い番組な

ら「出」で笑いを取ることは可能だろうが、卒業式の入場場面では泣く人がいれば、よほど特別な事情があると思われるだろう。「お涙頂戴」には「感極まる」までの時間経過と、物語（手続き）が必要なのである。

現在、小中学校の卒業式では、証書授与や祝辞を終えた後、数曲の合唱を組み込んだ「呼びかけ」が行われることが多い。卒業生一人一人と、在校学年の数名が短い台詞をつなぎ、所要所で一斉発話と合唱が行われる。この後は校歌と閉会の辞があつて卒業生退場となるのが一般的な式次第であり、台詞と歌が卒業式の見せ場、泣かせどころとなつている。

したがって、卒業式の歌の人氣や成否を左右するのは、「感動と涙」である。「心にしみる」「泣ける」といった言葉は卒業式ソングに与えられる最高の賛辞であり、人は泣くために卒業式ソングを聴き、そして歌う。手もとにある、卒業式ソングを集めたCDの帯からコピーを拾ってみよう。「感動とやさしさがつまった」「学校生活最後の日、みんなで心ひとつに通わせてうたう」「涙で声をつまらせた感動の名曲」「全国の卒業生が涙した」などのフレーズは、卒業式ソングに期待されるものが何であるかを物語っている。

二 学校唱歌の始まりと卒業式

さて、日本の学校音楽教育は、明治五年の学制に「唱歌」という教科が置かれたことに端を発する。しかし、文部省においてすら教科内容の具体的イメージは皆無、教材開発も教員養成も開始されない状況で、「当分のヲ欠ク」と但書が付された。唱歌がようやく尋常小学校の必修科目となったのは、明治四〇年である⁴。しかし、その途上から「学校唱歌校門を出ず」と揶揄され、教科の基盤を固めるには相当の困難があった。そこで、以下では卒業式が学校唱歌の広報戦略の場であったと仮定し、卒業式を基軸として明治期の唱歌教育を読み解きたい。なお、明治期の卒業式については、いくつかの小論を参照されたい⁵。

明治一〇年、東京女子師範学校附属幼稚園で「保育唱歌」の教授が始められた⁶。「保育唱歌」は東京女子師範学校が式部寮雅楽課に依頼して作成された曲集で、雅楽の音組織を用い、和琴や勺拍子の伴奏で歌われた。この「保育唱歌」は、地方から東京女子師範に派遣された教員により、早速伝えられた例もあったようだ。仙台市の培根小学では、明治一一年一〇月の裁縫科試験の際、七・八級⁷を終えた休憩時間に「百鳥、秋ノ日影、寒夜、家鳩などと云ふ唱歌

を唱へて鬱屈を散し…参観人の我らまでも一時欠伸を忘れたり」と報じられている⁸。この後、五・六級の試験があり直ちに証書が与えられたという。

ここに見るように、当時の小学校の卒業証書は試験合格者に対して即日渡されるもので、「七級卒業」のように各級の合格を卒業と称した。また、試験は学区取締や戸長などの役員臨席の下、父兄や一般にも公開される学校最大の行事であった。こうした状況に照らすと、このときの唱歌は単なる気分転換ではなく、唱歌という新奇な教育内容を他に先駆けて取り入れ、成果を挙げていることを広く参観者に示す意味も有していたと考えられる。そもそも、当時の就学率は四割（女子は二割）程度で⁹、学校といっても寺子屋式の手習い師匠による江戸時代となんら変わらない内容、方法をとるところも少なくなかったから、試験の公開自体が、近代学校の何たるかを示し、就学に向けて人びとを啓蒙する機会だったのである。また、試験は必ず証書授与と結びついており、卒業式は試験後の証書授与から派生したと考えられる。

卒業「式」という学校行事が始まったのは、管見の限り明治九年陸軍戸山学校においてである。また、東京大学では翌年に最初の卒業生を出し、いずれも陸軍軍楽隊による

奏楽が行われた。明治四年、兵部省が陸軍と海軍にそれぞれ軍楽隊を設置して以後、明治五年の鉄道開業式をはじめとする重要な式典には軍楽隊の奏楽が行われており、官立学校卒業式もそれに準じたのであろう。また、幕末維新期の留学生が見聞したアメリカの学校の卒業式でも吹奏楽が行われた例があり¹⁰、その形式が参考にされたことも推量に難くない。

明治一二年、皇后臨席により東京女子師範学校第一回卒業式が行われた。この式次第には理化学試験、作文朗読、唱歌、体操が含まれている¹¹。これが唱歌の歌われた日本で最初の卒業式と思われるが¹²、この卒業式は証書授与や祝辞・答辞¹³からなる儀式であるのみならず、生徒が学習した近代教育の成果を広く公表する場でもあった。このとき歌われたのは、前述の「保育唱歌」のうち、『学之道』¹⁴《春日山》《民草》の三曲である。初期の卒業式に体操や理科実験を含む式次第が珍しくないのは、貴顕が多数集まる場で新しい教育内容の成果発表を行ったものであり、唱歌もそのひとつとして歌われたのであった。

同じ一二年には音楽取調掛（後の東京音楽学校、現東京藝術大学）が設置され、翌年春にはボストンからL・W・メーソンが招かれた。取調掛に着任したメーソンが最初に

指導を始めたのは、東京師範および東京女子師範とその附属小学校・幼稚園であった。「西洋唱歌」の伝習成果は、早速その年の卒業式から披露された。曲名は一部しかわかっていないが、『蝶々』『霞か雲か』といった、日本の音楽教育に決定的な影響を与えた教科書『小学唱歌集』¹⁵掲載曲が中心である。式当日には取調掛教員の管弦楽演奏も行われて、官立師範学校と附属小学校では、卒業式と唱歌・奏楽の結びつきが決定的となった。

興味深いのは、E・モースが来賓として出席した、明治一五年女子師範（含附属小）卒業式の模様である。小さな子どもまでが一人ずつ呼び出されて深々とお辞儀し、証書と賞品を受けとって恭しく頭上に捧げる様子が鮮明に描写されている。式の最中には『平和の天使』『オールド・ロング・サイン』等の「我々の唱歌が二、三曲」歌われ、後者は特に上出来で、続いて「琴三つ、笙三つ、琵琶二つを伴奏とする日本の歌」が歌われたという¹⁶。

このように卒業式で唱歌を発表することは、唱歌教育の推進者にとって大変重要であった。官立師範学校卒業式には、文部省関係者や他の官立学校教員、各県師範学校長などが参集し、特に各県師範学校は東京師範と同女子師範の教育を「範」としたからである。まして、「全体音楽を教

育上必要なものとして置くのはどう云う訳であろうか、国民の生活の程度が低く国民の習慣が違ふから普通学校から取除けたら宜しかろう」¹⁷といった意見が多数を占め、伊沢修二でさえ西洋風の音楽を学校へ取り入れることに「一時は殆ど絶望に陥る程」¹⁸の状況にあつて、卒業式でのデモンストレーションは唱歌にとつて不可欠な広報戦略であつた。

明治一五年から一七年にかけて、『小学唱歌集』（初編、三編）が発行されたが、その制作過程は唱歌教育への反対や無理解への対処と並行していた。その主な対処方略は、明治一二年の教学聖旨に則つて徳育（修身）を補強する教科として認知させることであり、次いで体育面への貢献であつた。一四年の「小学校教則綱領」第二四条は、「凡唱歌ヲ授クルニハ兒童ノ胸膈ヲ開暢シテ其健康ヲ補益シ心情ヲ感動シテ其美德ヲ涵養センコトヲ要ス」と定めた。『小学唱歌集』は、この基本方針の下に編まれた教科書である。一部の学校のこととはいえ、卒業式において恭しい礼式¹⁹の実践とともに、体操や唱歌の成果が披露され始めたのはそうした時代のことであり、そこで歌われたのはほとんどが『小学唱歌集』の曲であつた。

三 小学校における卒業式と唱歌の普及

学制期、教育令期において、多くの小学校では試験終了当日に証書授与が行われたが、それは「式」とは呼ばれていなかった。子どもたちは試験が終わつても集計結果が出るのを待たされ、証書授与の場で「及落宣告」がなされた。ある回想録では、証書授与を「あげさげ」と呼んでいる。せっかく着飾つて来たのに、いつまでたつても名前が呼ばれず、落第と知つて泣き出す子どもが多数いたという²⁰。「さげ」られた子どもと保護者は、いたたまれなかつたことだろう。この回想は、私たちになじみの「卒業式の涙」や厳肅な雰囲気からは程遠い。

こうした証書授与のあり方は、明治一三年の改正教育令によつて示された徳育重視の姿勢が浸透するにつれて問題視された。同一七年の千葉県葛飾郡小学校定期試験細則には、「学校ハ生徒ノ徳性ヲ涵養シ礼法ヲ習シムル所ナレバ卒業証書ヲ授与スルハ最モ鄭重整肅ナルヲ要ス」²¹として、あらかじめ及第生だけを集めて整列、着席させたとと思われる授与執行手順が示されている。ここから、公立小学校でも「式」成立の前段階に至つたことがうかがえる。

一方、明治一〇年代末ごろから、各県師範には音楽取調

掛や東京女子師範で伝習を受けた教員が順次配属されはじめ、唱歌の実践が広まりつつあった。その唱歌は、附属小の卒業式でも披露された。師範附属小では、他の公立小に先駆けて卒業式が成立し、東京師範と東京女子師範の卒業式がそうであったように、唱歌の発表を含んだ式が行われるようになった。たとえば、明治一七年二月の山形県師範附属小卒業式では、「保育唱歌」からの二曲と、『我が日本』《五常の歌》など『小学唱歌集』（初編）の四曲が歌われた²²。こうした各県師範附属小の卒業式には、県内の主な公立小学校長なども出席しており、卒業式に歌われた曲をみると、唱歌の伝播経路の一端をたどることができる。

明治二〇年ごろからは、各地で唱歌講習会も開かれるようになる。講師は中央で唱歌の伝習を受けた人であり、主な受講生は現職教員や教員をめざす人たちで、講習を受けると免状が交付された。その閉会式でも、免状授与に際して多くの唱歌が歌われ、講習を終えた教員たちは、学校へ戻ると習ったばかりの歌を早速子どもたちに口伝えて教えた。そのような学校では当然、卒業式にも唱歌を取り入れられた。小学校の初期卒業式に歌われた曲の多様性をみると²³、卒業式に特有の選曲がなされていたとは思えず、習い覚えた歌を発表するのが主目的だったと考えられる。唱

歌科を開設できる小学校は限られていたため、唱歌を披露することが学校の格を示すことにもなった。さらに、風琴（オルガン）を購入できた学校では、卒業式が風琴の公開も兼ねた広報にもなったのである。

唱歌の成果発表は、それがまだ一部の実践であったとしても、斉唱という行為が人心に多大な効果をもたらすことを示した。外山正一は明治一九年一月、下野私立教育会での講演で、「音楽グライ社会ニ必要ナモノ」はなく、道德上にも愛国心にも関係すると述べている。そして、「愛国ガ宜シイ宜シイト云ツテ教科書ヲ説イテモ子供ハ能ク感ジマセヌ ソレヨリモ『やしまのうちのまもり』ヲ歌ツタ方ガ愛国ニナリマス」と説き、会員たちの唱歌に対し「唱歌ヲ大勢ノ人ガ謡フノヲ聴イテ大イニ同情ガ起リマシタ」と感想を述べた²⁴。

ここにいる「同情」は、不幸や苦悩に陥った人に寄せる憐憫に近い情を指すのではなく、「心を同じくすること」、現在の言葉にすれば「共感」を意味している。以下、明治期の用法としての「同情」に着目して、考察を進めたい。外山の演説に出てくる「やしまのうちのまもり」とは、他ならぬ《蛍の光》である。今は歌われなくなった、その三番四番の歌詞を挙げてみよう²⁵。

三 つくしのきはみ。みちのおく。

うみやまとほく。へだつとも。

そのまごころは。へだてなく。

ひとつにつくせ。くのために。

四 千島のおくも。おきなほも。

やしまのうちの。まもりなり。

いたらんくにに。いさおしく。

つとめよわがせ。つつがなく。

一番二番は別れの歌だが、後半はまぎれもなく愛国歌である。島袋勉が指摘したように²⁶、『螢』は明治一〇年代前半の微妙な領土問題を直接に反映しながら制作、修正が行われた、政治的、国家的意図を極めて強く打ち出した歌だったのである。

今でこそ卒業式歌の元祖、典型のように見られている『螢の光』だが、明治一〇年代末ころは、「当今東京では帝国大学出身の学士や学生の人々には何か立食とか集会とか致す場合には下手なり『螢の光』や『思い出れば』位は知らない」と皆唱って居る所で独りボンヤリとして何だか肩身が狭い²⁷といわれていた。限られた一部階層の中ではあったが、『螢』はさまざまな機会に歌われる流行歌的な存在

だったのである²⁸。再び外山の演説を引けば、「長歌トカ常磐津」など日本の歌は、「大勢寄ツテ立派ニ誰レニモ恥ヂズニ謡フコトハ殆ト」なく、「愛国心ヲ起ストカ人ノ情ニ訴フル為メニ大勢ノ人ニ同情ヲ起サセルトカ云フコトハ出来」ないのに対し、『小学唱歌集』をはじめとする西洋唱歌では、「同情」を起こさせることができる。大勢で歌って「同情」を得たり、歌えないことで疎外感を味わったりする―斉唱によって引き起こされるこうした感情は、当時経験され始めた新しい感覚なのであった。

この、集団活動による感情経験は、明治二〇年代に入ると小学校にも少しずつ浸透し始めた。それを公開し、「同情」を得る最適の機会は、やはり外部の人たちが多数集まる卒業証書授与式であった。なお、戦前の学校儀式といえは、祝日大祭日儀式を思い浮かべる人も多いが、それが学校で挙行されるようになるのは明治二四年の天長節以降のことであり²⁹、それ以前の学校儀式といえは、新年開校式と証書授与式に限られていた。

それは、ちょうど等級制から学年制への移行期にあつた。また、受験する子どもと試験科目の増加により、試験当日の証書授与が不可能となつて、日を改めての授与式が一般化しようとしていた。授与に際しても、「卒業」と

「修業」、つまり学校段階すべての終了と学年の終了とを区別するようになってきた。それにより、学年ごとに別の曲を歌って、それぞれの「同情」を感じることも可能となる。より明確な集団の成員性を感じつつ、斉唱による感情経験を行えるようになってきたのである。卒業式という祝いの席で「やしまのうち」や《君が代》を立派に斉唱できるのは、業を終えて有為の人材となることの証であり、それを共に歌い、聴く人とも「同情」を分かち合うことは、社会における音楽の必要性を広報するのに役立ったことだろう。

天皇制儀式に「相応スル唱歌」を歌うことが定められ、明治二六年に「祝日大祭日歌詞並楽譜」として八曲³⁰が確定するのは、卒業式で唱歌を歌い、「同情」を喚起される先行経験が土台となっている、というのが筆者の見解である³¹。従来からの定説通り、祝日大祭日唱歌が定められたことによって唱歌科を開設する学校が増加していったのは確かだろうが、このように時系列をたどってみると、卒業式における唱歌の実践こそが、祝日大祭日唱歌につながっていったと考えるのが自然である。

四 卒業式歌の誕生

しかし、当該儀式専用の唱歌として最も早く成立したのは、卒業式歌ではなく、高崎正風作詞、伊沢修二作曲の《紀元節》であった。これは、森有礼の依頼により作成され、森が主催した明治二年の紀元節祝賀式典において披露された、最初の祝日大祭日唱歌である。ここに、特別な一日のための、特定の儀式専用の唱歌が成立した。

前述のように、卒業式には『小学唱歌集』掲載曲を中心として、多様な唱歌が披露されていたのだが、《紀元節》に触発されたのか、明治二二年以降はタイトルに「卒業式」の語を含む歌、つまり卒業式専用の唱歌が生み出されるようになる。そのうち最も早いと思われるのが、中村秋香作詞の《卒業式》である³²。この歌の新しさは、他ならぬ年に一度の卒業式という特定の儀式専用であることに加え、直截な感情語が含まれることにある。三番まである歌詞の、二番と三番は以下のとおりである。

二 諸共にけふこそえたれ

まなびのしるしはもとに

歲月努めし学びのしるしハ

けふぞえたれもろともに

三 もろこゑによるこびうたへ

うたひていはえやもろごゑに

うれしきこのひぞたのしきこのひぞ

祝へうたへ諸声に

《蛍の光》や《仰げば尊し》も、別れの感情を歌っているとの反論があるかもしれない。しかし、そうした感情は「思えばいと疾し」や「いざさらば」といった語からなる歌詞全体によって構成されているのであり、そこに「樂し」「うれし」といった感情語は含まれていない。別の例も見よう。

一 業をしまし、嬉しさは

そもそも何にかくらぶべき

やまなす人中わけゆきて

をはりのしるしを得る心

二 我等はこれよりいや遠き

学のみちすぢふみわけて

いさをの山にたちいりて

皇国をかざる玉もえむ

一八九二年発行、伊沢修二編『小学唱歌』（巻之二）に掲載された《卒業式歌》である。同書の解説によれば、一番が全生徒、二番は進学する生徒が歌うよう意図されている。続く三番は就職する生徒用の歌詞、四番は再び全生徒用で、その最後は「別れて年月へぬるとも／たがひにこゝろはかはらじな」と結ばれている³³。卒業式専用の歌は、明治二〇年代半ば以降相次いで生み出されるようになったが³⁴、中でも後年よく歌われたのがこの曲である。前曲同様、証書を受けることのうれしさを歌っている点に加え、それぞれの集団の立場に応じた歌詞を分担して歌う点が特徴である。

その後卒業式専用の歌が数多く作られていく中で、こうした特徴は基本的に踏襲され、より鮮明になる。別れを歌うにしても、従来から歌われていた曲に比べ、卒業に限定した具体的な状況が詠み込み込まれていく。また、一番で在校生が卒業生に向けて「君等」と歌いかけ、二番で卒業生が「我等」と応え、三番で「互いに」と唱和する例³⁵に代表されるように、所属集団の成員性を明確にしている。その中に含まれる感情語は、自分がどの集団に属しており、今置かれた儀式という場にあつて、どのような感情を持つべきかを規範的に示すことになる。

等級制の時期には五歳以上異なる年齢の生徒が同じ級に属することも珍しくなかったが、学年制実施以降はほぼ同年齢の子どもによって学年が構成されるようになってきた。また、明治三三年の小学校令により卒業認定のための試験制度が廃止されると、落第が減り卒業率が上昇する。つまり、より均質な集団として入学し、一緒に卒業する確率が高まるのである³⁶。こうした変化に応じて、卒業式の性格も試験に及第した個人の顕彰から、数年を共に過ごした同年齢集団の祝祭へと変わり始めていた。そして、そのころには、どの学校でも卒業式が重要な学校行事として定着していた。

式次第の構成を見ても、初期には唱歌が最後、または最初と最後に数曲まとめて歌われていたのが、明治三〇年ごろには、開始直後、証書授与の後、答辞の後、最後といった要所に一曲ずつ、式次第の直前の内容を受けた唱歌が歌われる形に定型化している。式の最初に《君が代》や《勅語奉答》といった国民としてのアイデンティティを確認するネーシヨンの歌を斉唱し、証書を授与されれば教師への感謝を歌い、送辞と答辞に続いて別れの歌を交わすことで、「同情」を強化する構成が確立したといえよう。

同じころには、唱歌科の実践も少しずつ積み重ねられ、

教授細目を編成する学校も増えてきた。教授細目というのは現在の指導計画のようなもので、唱歌科の場合ほとんどが各学年の年間配当曲目を並べた形をとっている。どの例も、祝日大祭日唱歌はもちろんのこと、季節の歌がふさわしい時期に配置され、各学年とも最終学期には卒業式用の唱歌に重点を置いて編成されている。つまり、相当の時間をかけて卒業式の歌を練習し、当日に向けて「同情」を高めていくよう指導することが、唱歌科の年間指導計画上、最終的な内容と目標になったのである。その結果、卒業式での唱歌は練習を積んだ成果の発表であることに変わりはないが、上手に歌えることよりも、あるいは上手に歌えるだけではなく、感情教育の成果が表れているかどうか問われることとなった。

五 「同情」の変容

さて、結婚式や告別式を想像すればわかるように、儀式の参加者には、その場にふさわしい特定の感情を感じたり表出したりすることが期待される。卒業式も同様であるが、その感情のニュアンスにおいて、初期卒業式と明治後期のそれとは同一ではない。それが正確にはいつ、何ゆえに起

きた変化なのかを検証することは本稿の範囲を超えるが、次の事例はすでに述べてきた初期卒業式における「同情」よりも、現代の卒業式において期待される感情と重なっている。明治三五年に出された、小学校卒業式についての教員向け解説である。

是れ實に児童に取りて重大なる儀式にして、今や彼等の生活に一段落を附け、景慕措く能はざる恩師と離れ、日々勉學嬉戲せし學校を見捨て、互に親しみし生徒等と別れ去らんとする卒業生の心情は喜しく悲しく奇異の感を起すべし、之れと等しく在留せる生徒にありても、轉た一種の情懷・禁じ能はざるものあらん……されば此の際愛情・同情等の如き諸種のよき感情を養成せんことに注意し……³⁷ (傍点引用者)

ここに記された「同情」は、至極具体的に「卒業式において感じるべき同情」の中身を規範的に明示しており、そこへ「善導」することの重要性を主張している。唱歌は当然、その「よき感情の養成」を担うべき重要なファクターである。明治も半ば以降になると唱歌集の種類も豊富になり、そこには卒業式専用の唱歌も次々と発表されていたわ

けだが、明治後期の歌詞からも「同情」の変化を読み取ることが可能と思われる。一例を挙げたい。

- 一 われらが学も昨日とすぎけり、
親しき友どちうち群れ遊びし、
楽しき学びの教への庭さへ、
今日はやかざりと思へばかなしや、
いざ、いざ、友どち別れん。
- 二 希望の峯こそ遥かに彼方よ、
学を卒へしも思へば門出か、
山路はこれより峻はしときくもの、
さらばよ友どち力を協せて、
いざ、いざ、友どち進まむ。³⁸

まず気づくのは、「悲し」の語が使われていることである。明治期の卒業式歌に含まれる感情語には、「うれし」「楽し」が圧倒的に多いものの、明治期最後の一〇年間に発表された中には、「悲し」を含むものも見られる。それは、『螢の光』や『仰げば尊し』のように「はや」「いつしか」過ぎた年月ではなく、一緒に学び遊んだことなどの具体的な状況や出来事と結びついた、いわば「われらの記

憶」を徵募して歌われる感情である。

もはや、「うれしき」を感じるだけでは不十分になったということだろう。卒業式を迎えて「奇異の感」を抱き、表現することこそが、教育目標への到達を示す姿とみなされる。規範的な感情を自分のものとして感じる事が、成長の証として評価され祝福されるのである。そして、儀式に参加する者たちすべては、相互に評価する者でもある。

よい卒業式であったと評価する基準は、「よき感情」がふるまいや歌声や表情に表れていたか、その場の成員が「よき感情」に共感し、それを共有することができたかである。

その儀式においてクライマックスを担う卒業式歌は、唱歌科の集大成としても位置づいていった。唱歌科が必修科目となったのは、尋常小学校が義務制となり、修業年限が四年から六年に延長されたのと同時であった。子どもが学校へ行き、卒業するのが特別なことではなくなったとき、つまりほとんどの子どもが卒業式歌を歌うようになったとき、唱歌も学校に根付いたのである。

それから約百年を経た今、唱歌は校門の外にあって「懐かしい学校の記憶」を呼び覚ますスイッチとして働いている。年配の方たちにとっての唱歌は、センチメンタルでノスタルジックな回想へと結びついており、さらに広い世代

からも、唱歌は歌い継ぎたい「日本の歌」として認知されるに至っている。とりわけ、卒業式の歌は具体的な学校体験、人間関係を想起させるように思われ、卒業式による唱歌の広報戦略は功を奏したといえるだろう。

一方、若者たちにとっての卒業式ソングは、淡い、あるいは熱い恋心や青年期特有の心理的葛藤、ときには反社会的な心情までも投影しうるツールである。卒業式でどの歌を歌ったか、あのころどんな卒業式ソングが流行していたかで、世代のアイデンティティを確認することもできるのである。

最後に、現代の学校教育に目を転じよう。新年が明けると間もなく、小中学校では約二か月後をめざして卒業式の歌の練習が始まる。それは、小学校六年生で五〇時間、中学校三年生で三五時間と定められた音楽科年間授業時数のうち、相当の割合を占めている。「学校五日制」「学力低下問題」などが取り沙汰されるたび、音楽科は時数削減や他教科との統合、選択化、廃止を含めた政策論議の標的とされる。そのとき、常に強力な反対理由となるのは行事、とりわけ儀式での歌唱が不可欠であり、心を合わせて歌うことで共感、感動を得られるという点である。それは確かに、尊い経験に違いない。だが、それが最大の存在理由である

ならば、現行音楽科は、外山の演説にあつた「道德」や「同情」から、いったいどれほどの隔たりを持ちえているのだろうか。

【注】

1 卒業式の歌がこのように多く生み出されるのは、日本に特有の現象である。なお、卒業式と《君が代》の問題について、ここで深く立ち入ることはしない。

2 松本隆作詞、簡美京平作曲、《卒業》。一九八五年、斉藤由貴のデビュー曲。

3 他者から直接または間接に非難を受けないとしても、「泣けない私はおかしいのかもしれない」と疑ったり悩んだりすることがすでに、「社会的な視点を取り込んだ私」が「私」に与えるサンクションである。

4 明治四〇年勅令五二号小学校令第十九条で必修科目と示されたが、附則第五項に「唱歌ハ当分ノ内之ヲ欠クコトヲ得」とある。この附則が削除され、特殊な様態の小学校を含めたすべての児童が唱歌を学ぶようになったのは大正一五年であった。

5 有本真紀「卒業式の成立と定着過程―明治期前半の教育雑誌・学校日誌を通して」『立教大学教育学科研究年報』第五一号、二〇〇八年、五〇二頁。同「学校の儀式で歌う歌はいつから」文部科学省『初等教育資料』八四三号、二〇〇九年a、六二―六五頁。同「明治前期・中期における卒業証書授与式の意義―式手順の検

討を通して」『立教大学教育学科研究年報』第五二号、二〇〇九年b、五〇二頁。同「卒業式の唱歌をたどって」わらべ館童謡・唱歌研究情報誌『音夢』第三号、二〇〇九年c、二―一三頁。同「明治中期以前の卒業式次第における唱歌―卒業式に対する観念の形成過程解明へ向けて」日本音楽教育学会編『日本音楽教育学会四〇周年記念論集』二〇〇九年d、五八―六七頁。

6 日本の近代学校における唱歌教育は、明治七年、まだアメリカ留学前の伊沢修二が愛知師範学校で実践したのが最初とされている。

7 当時の小学校は上等・下等の二科に分けられ、各八級からなる等級制をとっていた。

8 「仙臺日日新聞」明治一一年一〇月二八日。ここでは、高野俊『明治初期女児小学の研究―近代日本における女子教育の源流』大月書店、二〇〇二年、三三四頁による。

9 この数字は『文部省年報』による公式統計だが、就学率についてはこれまで多くの疑義が出されている。その代表的なものを一点挙げるなら、土方苑子『東京の近代小学校―「国民」教育制度の成立過程』東京大学出版会、二〇〇二年。

10 塩崎智「幕末維新在ブルックリン（NY州）日本人留学生関連資料集成及び考察（三）」主に一八七〇年度BPI卒業式と高戸賞士インタビュー記事について『拓殖大学語学研究』一一七、二〇〇八年、三三―五六頁。

11 文部省『教育雑誌』第九五号、一八七九年、二六―三九頁。

12 これより以前に、キリスト教系学校卒業式で賛美歌が歌われた可能性は否定できないが、「唱歌」に限定すれば、卒業式に歌を取り入れたのはこれが最初であろう。

13 当初の答辞は、来賓の祝辞に対して校長等が答えるものであったが、明治二〇年ころには、来賓や教員の祝辞に対して生徒総代が答辞を行うようになった。祝辞や授与に対して生徒総代が行う弁舌を「謝辞」というのは明治二〇年代末ごろからであり、在校生総代の送辞と卒業生総代の答辞の対が一般化するのには、明治期末以降のことである。

14 「みがかずば」で始まる《学之道（学道）》は、皇后が明治九年に東京女子師範学校へ下賜した和歌で、同校の校歌となった。

15 『小学唱歌集』は、その表紙（すべての版ではないが）に、「小学校師範学校中学校教科用書」と示されている。明治前期において、この曲集を使って唱歌を習ったのは、小学生よりも師範学校生徒や唱歌講習会の受講生のほうが多かったと思われる。

16 E・モース、石川欣一訳『日本その日その日』第三卷、平凡社、一九七一年、六四〇六七頁。《オールド・ロング・サイン》は《蛍の光》の原曲で、スコットランド民謡。「日本の歌」とは、おそらく「保育唱歌」のことであろう。

17 島田三郎「国民教育の意義」、全国教育者大集会編『帝国六大教育家』、博文館、一九〇七年、一〇頁。

18 伊沢修二君還暦祝賀会編『楽石自伝教界周遊前記』伊沢修二君還暦祝賀会、一九一二年、七一頁。

19 お辞儀、即ち立ったまま上体を前傾させる、我々にとっては説明不要の行為が、当時は「立礼」として特に教えられたり、新たな規則として示されるような、特別なふるまい方であった。そのため、卒業式で立派な立礼を示すことも、新しい教育成果の発表であったとみなしてよいだろう。

20 『宮城県教育史』第一卷、一九七六年、八〇八―八〇九頁。

21 『千葉県教育史』巻二、一九七九年、八二八―八二九頁。

22 『山形県私立学事会雑誌』一二号、一八八五年一月、三五―三六頁。

23 明治三十年以前の卒業式に歌われた唱歌曲目一覧は、有本前掲論文、二〇〇九年d、六〇―六一頁に示した。

24 外山正一「女子教育論」『下野私立教育会雑誌』二四号、一八八六年一月、五―一〇頁。

25 『小学唱歌集』初編での題名は《蛍》である。ここでの歌詞は同書の表記による。

26 島袋勉「蛍の光」考（四回連載）『季刊音楽教育研究』九―一二号、音楽之友社、一九七六―一九七七年。（一）六二―七七頁、（二）九六―一〇九頁、（三）七四―八七頁、（四）一二八―一四二頁。

27 島居忱「音楽の理論及び実地」『千葉教育会雑誌』一〇七号、一八八七年七月、三三―三四頁。

28 明治二〇年代後半以降に発行された尺八や手風琴、吹風琴などの独習書（多くは数字による略譜で、五線譜の読めない人を対象

として想定している）のほとんどもに掲載されていることから、
《螢の光》が学校外に広まっていたと推測される。

29 明治二四年六月一七日に文部省令第四号「小学校祝日大祭日儀式規程」が出され、従来休日となっていた祝日大祭日に生徒を登校させて儀式を行うこととなった。同規程第一条第四項には「ソノ祝日大祭日ニ相応スル唱歌ヲ合唱ス」とある。

30 《君が代》《勅語奉答》《一月一日》《元始祭》《紀元節》《神嘗祭》
《天長節》《新嘗祭》。

31 有本前掲論文、二〇〇九年b、二六頁。

32 中村秋香作歌《卒業式》、奥好義編『唱歌萃錦第二』一八八九年。

33 山田源一郎作曲、山田美妙齋作歌、《卒業式歌》伊沢修二編『小学唱歌』卷之二、一八九二年。ここでは『日本教科書体系』近代編第二十五卷唱歌、講談社、一九六五年、八六～八七頁による。

34 国立音楽大学音楽研究所編『唱歌索引（明治編）』一九八四年には、タイトルに「卒業」を含む唱歌が五〇曲挙げられている。そのうち明治二四年以前に発表されたのは三曲である。

35 入江好治郎作歌、恒川鐙之助作曲《卒業式の歌》入江好治郎編『一・二・三唱歌集』一九〇〇年。

36 石川畠の鎌屋小学校では、明治二九年度の就学率は七六％と、全国平均を超えていたが、明治二五年入学の生徒五四人のうち、四年の年限を全うして卒業したのはわずかに八名、一五％であった。これが、明治三七年入学者では八八％になった。（浜校百年史発行委員会編『浜校百年史』一九七九年、三八頁。）

37 内田茂雄「訓練上より観たる小学校の儀式（下）」『教育時論』六〇七号、一九〇二年二月、一三頁。

38 小松玉巖作歌《卒業式の歌》山田源一郎『中等教育唱歌集』一九〇八年。

（立教大学文学部教授）